

して完成した。まず、他の遊具への誘導をはかりいっそう多角的、継続的に遊べるようにやぐらから南へ長い渡廊下を出して、その先に階段、中広滑り台を取付け、さらに東側には雲梯を渡してジャングル・ジム（従来のもを利用）に結びつけ、いっそう大規模なものにした。また、動く遊具がなかったので、その後、今春新設した波動廻転塔を複式滑り台とジャングル・ジム取付け滑り台の延長交点に設けて、全体を「ロの字型」の循環構成にした。（本年度の調査ではまた、総合遊具の中に含まれていない）第一図はその完成図の一部である。色彩は緑の季節の効果をねらって、オレンヂの濃淡二色を加えた。

#### B、調査

イ、目的 調査結果に現われた遊びをもととして、これを教育的にどのように発展させ、目的を達成したらよいかを知る手がかりとして、本年度入園して間もない子どもと昨年度一年間幼稚園で生活し、総合遊具の遊びを経験した子どもとは完成した総合遊具でそれぞれどのように遊ぶかについて調査した。（調査形式は昨年度に準じた）。

ロ、調査結果と解釈

(1) 戸外固定遊具の興味調査 (a) 全体的に動く遊具の利用度が高いのは昨年度同様で、女兒はブランコ、男児は新設の波動廻転塔（前にも述べたようにその後総合遊具に含めた）（表略）が最優位で、総合遊具は二位になっている。

(2) 総合遊具利用状況調査 (a) 昨年度に比べて取付遊具の増加にもなつて利用遊具数が全体的に非常に増加している。（表略）(b) 各取付遊具別にみると、利用度の非常に低いものは昨年度同様に登り棒と低鉄棒併用肋木である。また、年令の最も少い二年保育年少児

では中広滑り台が最も利用度が多く、一年保育や二年保育年長児では樹木の利用度が圧倒的に多い。（表略）

#### 五、今後の課題

本年度の調査は昨年同様の形式で行ったのであるが、この調査では総合遊具の遊びのごく末端的な面だけしかすることはできない。また、この調査は未だほとんど指導をほどこさないときのものであるから、今後は総合遊具のめざす集団的な遊びの構成、集団としての遊びの多角性・継続性・創造性・発展性等について子どもの実態をとらえながら、具体的な指導目標をたてて系統的・発展的に指導していかなければならない。そして、指導要項及其の結果を累加記録し、今後一年間あるいは二年間の指導記録と資料として総合遊具遊びのよりよい指導へと研究を進めていきたいと考える。

### 三歳児保育の効果について

お茶の水女子大学

津 守 眞

堀 合 文 子

我々は昨年一年間、三才児の組の子ども十五名について、いろいろの方面より記録をとってきたが、本年四月に新たに四才児が加わったので、三才のときに保育をうけた子どもと、三才のときは家庭のみで過した四才の子どもとを比較することを試みた。三才児の保育は、四才五才の場合とはよほど違って、まとまった仕事を中心と

する保育案も不可能であるし、多勢の子どもが一緒に共通の目標をもって活動することもむずかしい。子どものひとりひとりがかかり自由に動き、家庭にいるときのように自然に振舞いながら、幼稚園という社会的な場面の中で、その秩序を保ちつつ、友人同志の社会的な関係ができ上るようになるのに最も苦心を要したのである。ここで保育の目標としたことを要約するならば、第一には、先生が媒介となって友人との遊びを進めること、第二には、保育室の中のきまりや秩序を守ることである。このようにして三才のとき一年間保育して後に、三才の時幼稚園に來なかつた子どもとどこか相違が出てくるか否かを検討して、三才児の保育について考察する。

被験者　ここで主として考察の対象とするのは、三才児A組十五名であるが、質問紙調査では、三才児B組十五名をも被験児とした。

Aは三才児の年少、Bは年長である。比較群はA組に四才になつてから新たに入園した子ども二〇名と、B組に新たに入園した子ども二〇名である。Aの組で新しい子どもの平均年齢は昭和三十一年四月現在四才三ヶ月（最大四才九月、最小四才二ヶ月）古い子どもの平均年齢は四才七月（最大四才十一月、最小四才四ヶ月）であり、Bの組で、新しい子どもの平均年齢は四才十一月（最大五才一ヶ月、最小四才九ヶ月）古い子どもの平均年齢は四才十一月（最大五才一ヶ月、最小四才七ヶ月）である。知能指数及び知能年令を比較すると、Aの組で、新しい子どもの平均指数、一二九・五（最大一五七、最小一〇九）古い子どもの平均指数一二五・〇（最大一五三、最小一〇三）である。家庭的背景についてもこの二群は似ているとみてよく、親の職業は何れの群も会社員が大部分を占めている。その他家庭でうける教育的機会については、多少相異のある所もあるが、我々はそれ以上新旧の子どもを対にして比較す

るようなことはしなかつた。

方法及び結果　新旧両群を比較するために、ここでとつた主な方法は質問紙であり、三種類一二〇項目にわたっている。その各項目について、新旧両群について、 $\chi^2$ 検定を行い、統計的に両群の相異を明らかにしようとした。

一、第一質問紙は、保育室の中のきまりを守ることに關して九項目である。その一部が第一表に示してある。

第一表では、新旧両群の開きの比較的大きいものを取り出したが、結局、有意な差のあるものは僅かであった。これらは家庭における評価である。A組でうがいをする。人に挨拶をする、は家庭においても幼稚園にいらつた子どもの方がすぐれている。( )内に示したのは、幼稚園での様子を、三月の終りに個人別に家庭に知らせたときの幼稚園での評価である。手を洗うのように、家庭ではすんでやることも少ない項目も、幼稚園ではすんでやる子どもが多くなり、新しい子どもたちと明らかなる差を示してくる。しかし家庭でもすんでやる子どもが多い項目は、特に明らかなる相異を示していない。

二、第二質問紙は、前に述べた保育目標の第一の点である。すなわち、社会的関係と遊びを推進させることについてである。この一部が第二表に記してある。この項目は、我々がA組の三才児について、記録した約四百枚の逸話記録を整理して、三才のときに幼稚園の中で特長的にあらわれたと思われる行動を拾いあげ、約四〇の項目を作成した。すなわち、三才のときに、幼稚園であらわれる行動の代表的なものをここに選び出したと見てよい。それを、更にAB両組の教師が、それぞれの組について、一般的に見られる項目と、特定の子どもたちについてのみ見られる項目とを評価し、その結

第一表

	項 目	A		B	
		旧	新	旧	新
		15	20	15	19
手を洗う	自分でいわれなくともすすんでする 時折わすれる いわれないとしない	4(13) 9(2) 1(0)	5 8 7	7 4 4	4 9 6
うがいをする	いわれなくともする 時折わすれる いわれないとしない	○4(13) 9(2) 1(0)	0 3 17	○4 4 6	2 5 11
人に挨拶をする ・おはようございます ・さよなら ・こんちは	いわれなくとも自分からはっきりいえる いわれるとはっきりいえる いわれてもだまっている	○10(12) 5(3) 0(0)	3 16 1	2 11 2	5 12 2
食事お八つの時 いただきますをいう ごちそうさまをいう	いわれなくともいえる いただきますをいう ごちそうさまをいう	6(8) 9(6) 0(10)	13 7 0	10 5 0	11 8 0
手洗所へ一人でいって 一人で仕末する	いつもできる 大便の時だけしてもらう いつもしてもらう(手伝う)	11(14) 5(1) 0(0)	13 7 0	9 5 1	12 6 1
遊んだ後かたづけをする	いわれなくともいつもかたづけする いわれればかたづけする 手伝うと一しよにかたづけする ぜんぜんかたづけようとしな	3(4) 7(9) 2(1) 0	2 12 10 0	○1 8 5 0	5 11 3 0
オーバー・コート・帽 子など洋服の着脱を一 人でする	全部一人でできる 一部手伝えばできる ぜんぜん一人でではできない	○1(2) 12(11) 2(1)	7 21 1	○1 9 5	6 13 0

○印は % 検定で 5% 規準で有無な差のあるもの ( ) 内は幼稚園における先生の評価

果、比較的一般的に見られる項目を二十八選んで、質問紙とした。表中( )の中に示してあるのが先生の評価であって、Aは一般にその組で大部分の子どもに認められるもの、Bは約半数について認められるもの、Cはごく一、二の子どもにのみ見られるもの、Dは男の子にだけ見られるもの、Eは女の子にだけ見られるものである。

第二表

	項 目	A		B	
		旧	新	旧	新
		13	20	15	19
3	他の子どもや兄弟が母親に何か言うと同じ話題のことをまげずに話す	8(B)	11	9(B)	14
4	ままごとなどで電話のまねをして大人の口調をまねて話する	10(C)	17	11(B)	9
6	絵本を見ながら友だち(他の子ども)といろいろの事を話しあう	6(A)	14	8(B)	13
7	ひとの名前について特に関心をもっている	4(C)	3	0(B)	2
8	ままごとなどでお父さんやお母さんになりたくてけんくわする	1(E)	8	5(E)	5
10	他の子どもが悪い事や止められていることをすると「そんな事しちやだめぢやないの」とことばでたしなめたり非難したりする	9(A)	14	13(A)	13
13	七八人の子どもと一よになって自分たちで考えた遊びをする	2(A)	7	7(A)	6
14	昨日の遊びのつづきをしようとして昨日の遊びのつづきをする	7(A)	10	○12(B)	6
15	学校ごっこをして先生になったり生徒になったりしてあそぶ	6(E)	14	10(B)	9
17	珍しい所へいったりすると帰ってからそれを取入れた遊びなどを	10(D)	16	11(A)	11
18	自分が絵やお話などの主人公になったつもりでそのまねをする(おひめさま 王子さま)	6(B)	14	○13(E)	6
19	自分が動物になったつもりになって動物のまねをしてあそぶ	6(A)	8	8(A)	10
20	ごっこ遊びなどでお店やさんのまねをしてお金を払ってものをかう	8(A)	16	13(B)	11
21	遊んだ後おもちゃをかたづけする	7(A)	13	10(B)	9
22	花や部屋の裝飾などきれいなものに気づいて感心してながめる	9(C)	19	12(A)	13
23	にわとりなどに自分で菜をとってきてたべさせる	6(B)	5	6(B)	6
25	積木で飛行機・自動車などをつくってあそぶ	9(B)	15	14(D)	15
27	とめられている事を他の子どもがやると非難する	12(B)	16	12(A)	13
28	棒などで刀やピストルのまねをする	6(D)	14	3(D)	8

( ) 内は幼稚園における先生の評価 (A) 組の殆ど全員に見られた (B) 組の約半数に見られた (C) ごく一部のものにだけ見られた (D) 男子のみにみられた (E) 女子のみにみられた

さて、先ず、二十八項目について、新旧両群で有意な差のあらわれるところを見ると、A組では有意な差のある項目は一つもなく、B組で、14と18の二項目のみである。全体としてみれば、これらの項目については、新旧両群殆ど相異が認められないと見てよい。三、次に第三の質問紙は、基本的習慣と社会的能力について、八〇

項目より成る質問紙を新旧両群について比較したが、有意な差の見られたのは、A組で三項目、B組で一項目のみであり、全体としては有意な差が見られないので、ここでは割愛する。

#### 二つの質問紙に関する検討

一、うがいをする、人に挨拶をする、手を洗う、等は、単に幼稚園で皆ができるのみでなく、これらの中のある項目は、家庭でも相当よく実行されていることが示されている。これらは幼稚園で三才児に重要な目標の一つとなるものであり、たとえ数項目でも新しい子どもと旧い子どもの間に、家庭においても相異があることは、幼稚園における保育目標が家庭にまで浸透していることを示すものである。

二、第二の質問紙では、主として社会的な活動や遊びについてたずねたが、新しい子どもと旧い子どもとの間には差が殆ど見られなかったのである。これは、一方から見れば、新しい子どもと旧い子どもとの間に顕著な相異が見られず、三才のときの幼稚園の効果が見られなかったと考えられるかもしれない。しかし、他方、この事實は幼稚園で日常顕著に見られる活動は、大体において家庭でもふだんから見られる種類の活動であることを示している。すなわち、家庭で自然的にあらわれている活動は、幼稚園においてもそのままとりいれられているのである。旧園児も新園児も家庭におけるこれらの活動が同程度にあらわれているということは、旧園児が幼稚園にきたことよって、家庭における活動に質的な変化をもたらしたのでもなく、まさに同じ種類の活動を、幼稚園に來ない子どもたちもそれぞれの家庭においてしていたのである。ただ、これらの活動は幼稚園において、一層徹底して、また頻繁にあらわれている。それは第二表に( )の中に示した、幼稚園におけるあらわれ方

について、組の先生の評価したところによっても分る。例えば、6 絵本をみながら、友だちといろいろのことを話し合う、というようなことは、幼稚園においては殆どすべての子どもについて見られたことなのである。しかるに家庭においては、旧新ともにこのような経験をする子どもは約半数なのである。残りの半分は幼稚園に來て始めてこのような経験をすると考えられる。もっと極端にあらわれている例は、13 七、八人の子どもといっしょになって、自分たちが考えた遊びをするのである。これは幼稚園では大部分の子どもが参加している活動であるが、家庭ではこれがもっと少ない。また14 昨日のつづきの遊びをしようとして云って、昨日のつづきの遊びをする、はB組では新旧の子どもの間に差違の認められることであり、旧園児に多い活動であり、また幼稚園においては大多数の子どもに見られる傾向である。三才児の幼稚園の生活では、家庭で自然にあらわれる複雑な社会的活動が、更に強化された形で、また指導を加えられてあらわれているということができよう。

#### 友人と遊ぶ機会についての検討

幼稚園にくる子どもは、友人と遊ぶ機会が与えられているが、家庭では新旧両園児とも近所の子とも遊ばず、友だちがないというものがある。そのようなものは、旧園児に八名、新園児に六名あった。旧園児は家庭で友人と接触する機会がなくても、幼稚園では友だちと遊ぶ機会が豊富にあるが、新園児は家庭で近所の子と遊ばなければ、同年令の友人と遊ぶ機会は全く限られるのである。そこでこの二群について、上の第二質問紙の各項の検討を行なったが、いずれの項も差を認めることができなかつた。この点は更に検討を要することである。

#### 考 察

三年保育を経過した子どもと、然らざるものとの間に、相異の出なかつた理由を考えてみると、一、新園児と旧園児との間には家庭環境や素質による個人差の方が大きい。二、比較の方法がこゝでとつたものでは不適當であつた。三、三才のときの幼稚園の生活は、家庭における生活と本質的に相異をもたない。上の何れもが理由であらうが、私どもはこの第三の点を重視したい。幼稚園であらわれた活動の諸相が、家庭でもまたあらわれているものである、ということは、我々の保育方針の最初と合致した所でもあり、子どもたちが幼稚園の中でも、家庭と同じように自由に振舞つてくれたと考えることができよう。ただし活動の重点のおき所、程度の相異はあるはずである。そのような相異点は、ここに示したような質問紙では捉えることができず、もっと他の方法をとらねばならない。今後もっと違つた方法で検討を進めるつもりである。

三才児一年間の保育を通して、我々の感じたことは、三才といふ年令がいかに柔軟性に富み、その活動も流動的、瞬間的なものかといふことであつた。家庭のように柔軟性をもつた生活が三才児には必要なのであつて、それに対して柔軟性を欠いた保育が行なわれるならば、逆効果のある場合もあるのではなからうか。

## 幼年教育とはどういふことか

お茶の水女子大学

周 郷 博

(発表原稿不提出)

## 「幼稚園教育要領」

### の性格と問題点

大阪学芸大学

小川 正 通

#### 一、はじめに

「幼稚園教育要領」は、去る二月、公にされ、その趣旨徹底の会合などをへて、この四月から実施に移された。それは数年前から、出版が予約され、幼稚園界も待望していただけに、この新しい基準をえて一安心、全国の幼稚園では、これを基礎とし、実情に即し新たな指導計画を作成、保育の実践にはげみつゝあることであらう。

わたくしはかつて「保育要領」が出たとき、その意義と内容を明らかにするとともに、内容の一部に対していち早く、相当思いきつた批判を試みた張本人である。したがつて今回も、全く知らぬ顔ではすまされぬ義理と責任を感じながら、通読、かつ種々考えたのである。その結果、法的には今や廃棄された保育要領に対しても、一まつの郷愁を感じている。ここに幼稚園教育要領につき述べるに当つて、保育要領とも対比する所以である。

概括的にいふと、幼稚園教育要領は、相当よくできていて、保育要領よりたしかに数歩前進した。新しい意味の基準的性格のもと、無難に手際よく、一応、成功しているといえよう。当局と編さん委員諸氏の努力に対し、敬意を表する。しかしながら他方、本書も種